「美しいふるさと、雑感。」　山口県景観アドバイザー　三戸　光顕

近くに美しい景観として知られる棚田があります。水が貼ったときの水田は息を呑むような美しさで、神秘的ですらあります。小さい頃、家の手伝いでお百姓をしていました。里山にある田圃で、水も手ですくってそのまま飲めるようなきれいな山田でした。ただ機械化されていない当時は、苗代作りから始まるその作業は多分経験した人でないと理解できないほどの過酷さで、小学生のくせにおばあちゃん腰になってしまったことを、今でも覚えています。

これから先、農業に携わる若き後継者達が、棚田という致命的に合理化できない、従ってかなりの労働をかせられる場所を継続して維持できるかどうか、おおいに疑問を持っています。当事者の農業にかける情熱とともに、それを支える確かなシステムの構築は当然のこと、さらにプログラム実行のスピードアップが必要です。友人で棚田を描かせたら日本一の画家がいます。既に手遅れの所が多く、荒れ果てた田圃に水をはった様を、なんと想像で描いているということです。先日も棚田で結婚式をあげていたカップルのことや、文化や伝統といった農村の“知”をいま話題の団塊世代に伝授するシステム設立など動きは出てきていますが、現在の美しい景観を次代に継承していくことは、今に生きる人の最低限の責務だと思います。スピードアップです。

田畑の中に豊かな四季のうつろいを感じるとき、よくぞ日本人に生まれけりと思います。自分にとってこれぞふるさとの美しい「原風景」です。大切にしたいです。考えただけで涙が出てきそうです。